

# 矛盾と相反

## *Daisy Miller: A Study* をめぐって

笠 原 慎一郎

### はじめに

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) は、『デージー・ミラー』(1879) という中編小説のなかで、登場人物たちの性格のなかに潜む矛盾点を指摘している。登場人物たちの性格の矛盾や相反する言動を考察することによって、矛盾や相反が作品に与えている影響を考え、そのように描いた作者の意図を分析していく。

### I. 子供の矛盾

ウィンターボーン (Frederick Winterbourne)<sup>1</sup> はスイスのヴェヴェー (Vevey) のホテルで朝食をすませ、ホテルの庭園の小さなテーブルで食後のコーヒーを飲んでいると、男の子がやってくる。少年はランドルフ (Randolph Miller) というのだが、ウィンターボーンはこの少年と話しをするようになる。少年は、ウィンターボーンと同じアメリカ人であった。ただ、ウィンターボーンは長年ヨーロッパに住んでいてヨーロッパの習慣がすっかり身についている。しかし、少年はアメリカから旅行にヨーロッパに来たばかりで、ヨーロッパのことを嫌っている。少年は、「アメリカのキャンディーが一番いい」<sup>2</sup> と言う。だから、ウィンターボーンは、「アメリカの小さな少年が、一番いい小さな少年かい？」 (5) とランドルフに聞いたら、ランドルフは、「わからないよ。ぼくはアメリカの少年さ」 (5) と答える。また、ランドルフはウィンターボーンがアメリカ人であることを知ると「アメリカの大人が一番いい」 (5) と言う。そのような会話をして

いる時に、向こうの方から、ランドルフの姉であるデージー (Daisy Miller) がやって来た。ランドルフから彼女は自分の姉であると聞かされると、ウィンターボーンは、ついさっきアメリカの大人の男性は最も良いと言われているのだから、「アメリカの女の人が一番いい女の人」(6)と聞くと、少年は「ぼくの姉さんは一番じゃないよ」(6)と言う。ここまで見てわかったことは、ウィンターボーンが予測した子供の返答とはことごとく相反することをランドルフが言っているということである。がみがみうるさく言う姉のことをよく言わないことは子供らしい特質としてよく理解できる。また、自分のこととなると照れ隠しもあって、肯定しないだろうということも不自然ではない。ランドルフは、自分の家族のことや、自分のこととなると否定するか、わからないと答えるのである。子供には（あるいは大人にもよくある特質かもしれないが）ありがちなことだろうと私は思う。この辺で見られる子供の会話のなかに含まれる矛盾は理屈としてわかりやすい矛盾である。子供がもつ矛盾をジェームズはまず手始めに描いた。しかし、次から述べる登場人物たちの矛盾は、普通の大人たちにありがちだが、なかなかわかりにくい矛盾である。

## Ⅱ. デージーの矛盾

デージーは、汽車のなかで会ったイギリス人から、アメリカ人はホテルで暮らしているのかと聞かれる。このイギリス人はそう思っているのだが、実際はそれとは全く相反していて、デージーが言うようにヨーロッパに来るまではこんなにたくさんホテルがあるのは見たことがないし、こんなに多くのホテルに泊まったのも初めてなのである。しかも、そのことをデージーから聞いたウィンターボーンは、彼女がそういったイギリス人の思い込みを少しも不愉快に思っていないことに気がつく。彼は、きっとデージーはイギリス人の思い込みに不愉快な気持ちになったであろうと思ったのに、それに相反して、彼女は、全く腹を立ててはいない。それどころか、ヨーロッパでのホテル生活もとても快適なものであると思うようになった

とさえ言う。イギリス人の思い込みにしろ、その思い込みに対するデイジーの反応にしろ、いくつもの相反がある。ジェイムズは、細かいところにまで、人間の考え方のなかにある矛盾や相反した思い込みを描いている。ウィンターボーンは、デイジーに、伯母のコステロ夫人 (Mrs. Costello) を紹介すると言った。しかし、コステロ夫人はデイジーと彼女の家族の品行が気に入らず、デイジーと会うことを断った。彼はある日、デイジーから彼の伯母に会いたいと言われた。その時、デイジーは彼の伯母のことについて「あなたの伯母さまがどんな方かは、よく知っていますわ。私はきっと彼女のことが好きになります。気軽に誰とでも親しくする人ではないのでしょう。」 (16) と言う。そして、「女の人とは誰とでも気軽に交際しない方がいいわ。私はそういう人になりたくてたまりません。ところで、母も私も気軽に人とは接しないのです。私たちは誰とでも話したりしません。それに、誰でも私たちに話しかけたりしません。」 (16) とも言う。デイジーは、自分は、誰とでも気軽に話したりはしないと断言している。確かにウィンターボーンに最初に会った時、彼女はほんの少しの間（おそらく数分間）ではあったが、彼に話しかけられてもよそよそしい態度を示していた。しかし、結局のところ数分後には、果てしなくしゃべり始めたのである。それに、彼女は、自分もコステロ夫人のように上流階級の振る舞いをしているように言っているが、実際には、ジョバネリ氏 (Mr. Giovanelli) という氏素性のよくわからない人物と親密になり、彼女の回りにいるヨーロッパに住んでいるアメリカ人たちを当惑させるという上流階級の人々が決してしない行動をするのである。つまり、彼女は誰とでもよくしゃべる人であり、誰とでも気軽に接することができる人物なのだから、コステロ夫人とは根本的に違う。ただ、「コステロ夫人が言明していたように彼女は下品 (Common) だった。それにもかかわらず、彼女には不思議で優美な上品さがあり、そのことがウィンターボーンを驚かせた」 (18) のである。当時のヨーロッパの習慣になじんでいる人にとっては、デイジーの振る舞いは、確かに品が悪かったが、同時にそれとは相反している優美さがあったのだ。

コステロ夫人がデイジーに会いたくないということをウィンターボーン

の様子から、感づいたデイジーは、「どうして彼女が私に会いたいと思うの？」(17)と言う。それまでは、デイジーは自分のことをコストロ夫人と同じ種類、同じ階級の人間であり、また交際の相手を厳密に選ぶような上流階級の人間であるように言っていたが、今度は、自分なんかコストロ夫人が会いたいわけがないというようなことを言って、自分のことを卑下しているようにさえ見える。ついさっきは、自分も上流階級の人間であると堂々と振る舞っていたのに、急に謙虚になってしまっている。それまでのデイジーの行動と発言からは、全く矛盾したことになっている。さらには、コストロ夫人のことを「ほんとに！なんて彼女は人とは気軽に接しない人なのでしょう！」(17)と言って、さっきまでは、自分もそういう人間であると言っていたばかりなのに、今度はコストロ夫人のそういった姿勢に驚いてみせるのである。さらに、デイジーの矛盾点は続くが、デイジーは、ジョバネリ氏と会う時に、ウィンターボーンに言われたことが気に入らなくて、「紳士の方が私に指図したり、私のすることになんでも干渉することは決して許しません。」(32)と言う。しかし、ウィンターボーンが、「あなたは間違っていると思います。...時には紳士の言うことを聞くべきです。正しい紳士であれば」(32)と言うと、彼女は笑い出して「私は紳士方の言っていることをいつも聞いています。...ジョバネリさんが正しい紳士かどうか教えてください。」(32)と言うのである。初めは、紳士の言いなりにはならないようなことを言っているが、後では紳士の言うことはしっかりと聞いていると言うのである。こういったところにも矛盾が見られるが、もちろん、これは言葉の上での会話にすぎなく、実際には彼女は誰に何を言われようと好き勝手に行動する性格なのである。こういった気軽な会話のなかにも彼女には、矛盾が見られるのである。彼女は亡くなる前に、ウィンターボーンに伝えてほしいと母親に言っていた言葉があった。それは、ジョバネリ氏とは婚約してはいないということである。そのところを考えると、ジョバネリ氏を婚約相手に選ばなかったのは、デイジーが、彼のことをしっかりと観察していて、表面上は誰とでも簡単につき合いながらも、内面的にはその相手をしっかりと見極めていたとも考えること

ができる。こういったところにも、彼女の表面上と内面的なものとの相反が見られる。人物の性格を観察者<sup>3</sup>として眺めたジェイムズは、人間の行動のなかに見られるほんの少しの矛盾も見逃さなかったのだ。

### Ⅲ. ミラー夫人の意外な側面

ウィンターボーンは、ジョバネリ氏が、紳士を演じている人間にすぎないということにうすうす感づいていた。しかし、ミラー夫人 (Mrs. Miller) はジョバネリ氏の演技に気がついていない。ミラー夫人は、ジョバネリ氏のことをよくは知らない。そのよく知らない人物のことを紳士だと言ったり、さらに、自分の娘が婚約しているかもしれないというのに、そのことについて娘としっかりと話し合おうとしない。デイジーが、婚約しているのかどうかということについてデイジー自身がなんて言っているのかとウィンターボーンが尋ねると、ミラー夫人は次のように答えた。

“Oh, she says she isn’t engaged. But she might as well be!” this impartial parent resumed; “she goes on as if she was. But I’ve made Mr. Giovanelli promise to tell me, if she doesn’t. I should want to write to Mr. Miller about it—shouldn’t you?” (44)

ミラー夫人のこの言葉を見ているととてもものんきであるという印象を受ける。彼女は、結婚は、本人同士がよければそれでいいと考えていたのであらうか。どことなく、そういう考え方をもっているような気がする。それに、デイジーの父親のミラー氏 (Mr. Miller) も、そのことに関してはあまりうるさく言わなかったのであらうか。娘が、自分で決めればいいと彼女の両親は考えていたのではないかと思えてしまう。ただ、ここで、述べておかなくてはいけないことは、ミラー夫人の予想とは相反していて、デイジーは婚約してはいなかったということである。それはそうと、デイジーにとっては他人であるウォーカー夫人 (Mrs. Walker) でさえ、デイジーが氏

素性のよくわからないジョバネリ氏と一緒にいることをひどく心配していたのに比べると、ミラー夫人の姿勢は、やはりあまりにも娘に対して放任主義<sup>4</sup>であるように見えてしまう。しかし、そうかと思うと物語のなかで時として彼女には、それとは相反した様子がうかがえることがあることに気づく。例えば、物語を最初の方にさかのぼれば、スイスのシヨン城 (Chateau de Chillon) に行きたいと思っていたデイジーから、ウィンターボーンにつれていってもらおうと聞いたミラー夫人は、何の反応も示さなかったが、すぐ後にウィンターボーンが、ミラー夫人にシヨン城への案内役をつとめることになったと言うと「ミラー夫人のさまよう目は何かを訴えるようなそぶりを見せながらデイジーに向けられた…」(19) ののである。ミラー夫人は娘の行動に放任主義的である一方で、それとは矛盾して、娘の行動を心配している側面もある。さらに、物語の最後の方で、熱病にかかされているデイジーを看病している夫人にウィンターボーンは会ったのだが、その時に彼が夫人を見た印象は次のように述べられている。

... he saw Mrs. Miller, who, though deeply alarmed, was—rather to his surprise— perfectly composed, and, as it appeared, a most efficient and judicious nurse. She talked a good deal about Dr. Davis, but Winterbourne paid her the compliment of saying to himself that she was not, after all, such a monstrous goose. (50)

娘をほったらかしにしている放任主義的な母親から、有能で分別のある母親になっていることに彼は驚いたのだ。ジェイムズは、人間の心には相反あるいは矛盾する資質があると常に考えていたのであろう。人間の心や行動は状況が変化すればいくらでも変わり、以前考えられていた人間とは違った人間に見えることもあるということを示しているのである。

#### Ⅳ. ウィンターボーンのはずれる予想とどっちつかずの気持ち

スイスでシヨン城を見にデイジーをつれていった時、ウィンターボーンは、美しい女性を連れて行くということで、落ち着かない気持ちでいた。彼は彼女も落ち着かない気持ちでいてくれたらいいのにと考えた。しかし、彼女には、全くそんな様子は見られなかったことに多少不満を感じながらも、それでも彼女の慎ましやかな態度にウィンターボーンは安心する。これは、彼が少しばかり気かけながら予想していたこととは相反して彼女はとてもおしとやかであったからだ。そして、別の機会に彼の予想は再びはずれる。彼がジュネーヴに行くことを彼女は嫌がっていたので、次にローマで会うときにはきっと彼女は、とても熱烈に彼を迎えてくれると思い込んでいたのだが、実際に、ローマに行ってみると、彼女は、たくさんの男性と仲良くしていた。ウィンターボーンとしては、彼女がヨーロッパのおしとやかな貴婦人のように、一人で夢見心地で彼がローマに来るのを待っているだろうと期待していたのに、彼のことなどどうでもいいように多くの男性と話しているのである。登場人物の言動が以前と矛盾するものがよくあることに付け加えて、予想も常に相反する結果であることが理解できる。

やがて、デイジーの振る舞いに呆れた人々が彼女を家に招かなくなった。それを知って「ウィンターボーンは彼女に対して向けられたこのような冷遇について彼女はどのように感じているのか不思議に思った。そして、時々、彼女は少しも感じていないのではないかと思い、それが彼をいらだたせた」(44)のである。彼としては、彼女の行動を寛大に容認しながらも、彼女の振る舞いについて彼女自身にしっかり考えてもらいたいと思っている苛立ちもある。ここにも、彼の心に潜む、彼女の行動を寛大に受けとめる気持ちと、少しばかり非難して考える気持ちといった矛盾性を見ることができる。

ウィンターボーンの内心は次のように述べられている。

He said to himself that she was too light and childish, too uncultivated and unreasoning, too provincial, to have reflected upon her ostracism, or even to have perceived it. Then at other moments he believed that she carried about in her elegant and irresponsible little organism a defiant, passionate, perfectly observant consciousness of the impression she produced. He asked himself whether Daisy's defiance came from the consciousness of innocence, or from her being, essentially, a young person of the reckless class. It must be admitted that holding oneself to a belief in Daisy's "innocence" came to seem to Winterbourne more and more a matter of fine-spun gallantry. (44-45)

彼自身、デイジーの考えていることについては、完全に把握しきれないでいる。彼は、物語の最後の方で、相反することを言っている。それは、コストロ夫人との会話のなかに現れている。彼は、コストロ夫人と、デイジーのことについて会話をする。彼はデイジーのことを誤解していたのではないかと言った。そして、彼はコストロ夫人にデイジーのことについて、「彼女は亡くなる前に私にことづてを残していました。私はその時はその意味がわかりませんでした。しかし、後になってわかりました。彼女は人の敬意をありがたく思ってくれたらという事です。」(51)と言う。コストロ夫人が、それに対して「それは、彼女が人の好意に報いたらという事を控えめな方法で言っているのかしら？」(51)と聞くと、それには答えずに彼は、「伯母さまが去年の夏におっしゃっていたことは正しかったです。私は間違いをおかすようになっていました。私は外国にあまりにも長く住みすぎました。」(51)と言う。どうしてここで彼がコストロ夫人の質問に答えずに、しばらく考えた後、夫人が以前に言ったことは正しかったと言ったかという、デイジーの純粋さはかなりの可能性で彼の期待や予想を裏切ることがよくあることを学んだからではないだろうか。つまり、彼の期待や予想とは矛盾する結果が今までたびたび起こっていたのだから、デイジーに込めた期待や予想とは矛盾する結果になると考え直し



てそう言ったのだと思う。やはりデイジーは、彼の愛情を無意識的に裏切るかもしれないという思いが彼の心をよぎったのである。デイジーとウィンターボーンは、同じアメリカ人でありながら、アメリカから来たばかりの人と長年ヨーロッパで生活してきた人という違いが象徴的に明確に示されている。自由に生きることができるアメリカの習慣と、堅苦しい形式のなかでしか生きることができないヨーロッパの習慣という違いが現れている。しかし、自由なアメリカの風俗にも長所、短所という矛盾するものがあり、またヨーロッパの場合も同じである。ジェイムズは、それぞれの風俗の長所と短所を分析して小説を書いている。ただ、チャールズ・ホフマン (Charles G. Hoffmann) は、ジェイムズはアメリカの文化や社会に批判的であったと述べている。その根拠にジェイムズは、最後には、ヨーロッパに住み、アメリカには帰らなかったことをあげている<sup>5</sup>。ウィンターボーンが、アメリカとヨーロッパの文化の間に悩みながらも最後にはヨーロッパの習慣のなかで生きることを決意したことと似ている。とにかく、ウィンターボーンはデイジーと会ってから、常に心のなかに、アメリカの価値観とヨーロッパの価値観という矛盾する考え方が存在していたということである。コステロ夫人やウォーカー夫人のようにヨーロッパの習慣に完全に固執するわけでもなく、かといって、デイジーの行動を全面的に理解しているわけでもない。彼は、二つの異なった習慣の違いのなかでどっちにいったらいいかわからなくなっていたのである。しかし、最後にはそういった矛盾を捨て、因習的な社会に帰っていく<sup>6</sup>。

## V. デイジーの死後、気がついた彼女の気持ち

デイジーは、ウィンターボーンに彼女が婚約しているかどうかについて、どう思うかしつこく聞いてきた。彼は「あなたが婚約していようと、していまいと、それはたいした違いはないと思いますよ」(49)と言う。彼が、そのように言うと彼女は何かを言いたそうだったが、ジョバネリ氏が彼女に夜のローマに蔓延している熱病にかからないように早く馬車にのるよう

にすすめてきた。そして、ウィンターボーンも彼女に熱病には気をつけるように、帰ったら、従僕のユージェニオ (Eugenio) から薬を忘れずにもらうように言うと彼女は「もうかまわないわ。... ローマの熱病にかかろうが、かかるまいが」(49) と言う。ウィンターボーンが、彼女が婚約したかどうかは、彼にとって大した問題ではないというようなことを言ったために、このように言ったのである。彼女は、婚約したかどうかを彼がもっと真剣に考えて、そのことを深刻に尋ねてくれればいいと思っていたのだ。おそらく、ウィンターボーンも彼女が婚約したかどうかは気になっていたであろう。しかし、平静を装ってしまうあまり、彼女が婚約したかどうかについては、どうでもいいふりをしたのである。彼女が、しつこく自分の婚約のことについて言ってきた意味を彼はこの時は気がつかなかった。ただ、彼女は、以前にも、これとほんの少しばかり似たようなことをしている。それは、まだウィンターボーンとシヨン城に行く前のことである。夜、彼女は彼とホテルの庭で偶然会って話しをする場面がある。そこでは、コストロ夫人のことやシヨン城に見学に行くことについて話していたのだが、そこにミラー夫人がデイジーのショールを肩にかけてやって来て、それからしばらくして、ユージェニオがやって来る。デイジーは、何を思ったのか、ユージェニオにウィンターボーンとこれからボートにのると言った。ミラー夫人に反対するように頼まれてユージェニオはそれに反対する。すると、彼女は、「あなたは、それをお行儀の良いことだとは思えないのでしょうかね!... ユージェニオはなんでもお行儀が良くないと考えているのでしょうか」(21) と言って、ユージェニオの堅苦しさをあきれたように言う。ユージェニオは、すでに、デイジーやウィンターボーンの言った言葉から、彼ら二人でボートにのることを知っていながら、ミラー夫人にデイジーが一人でボートにのりにいくのですかと聞く。ミラー夫人がウィンターボーンもついていくことを言う。するとユージェニオが、ウィンターボーンにやっとした笑ったような目つきをしたようにウィンターボーンには思われた。そして、ユージェニオは、デイジーの好きなようにしていいですよと言うのである。すると、デイジーは「ああ。あなたは、ブツブツ言いた

てると思っていたわ！... もう今は行きたくなくなったわ」(21)と言い、急に行くことをやめてしまう。ユージェニオはデイジーの心のなかにある矛盾を見通していたのである。ユージェニオは、すでにわかっていることを、あえてミラー夫人に聞いて、デイジーの注意を引きつけた上で、デイジーの好きなようにしていいですよと言ったのである。つまり、デイジーは反対されると思っていた自分の行動を身近で親しい人に賛成されるとそれとは矛盾した反対のことをしたがることを知っていたのだ。ウィンターボーンは彼女のこういった気持ちの変化に振り回されるが、その結果、こういったことに振り回されないようにしようという気持ちも同時にもつことができたのである。それで、ジョバネリ氏と彼女が婚約したと思うかどうかということを彼女から聞かれた時に、ウィンターボーンが、それはどちらにしても自分には関係がないと言ったのである。しかし、このことに関してはユージェニオとの会話のやりとりのなかでの矛盾とは少し違って、彼女には、一途な真剣な気持ちがあったのだ。たぶん、そのことにデイジーの死後、ウィンターボーンは気がついたのであろう。彼女は、亡くなる前、熱病におかされながらも、自分はジョバネリ氏とは婚約してはいないということをウィンターボーンに伝えてほしいと言う前に、彼と一緒にいったスイスのお城のことを覚えているかということを彼に尋ねてほしいとミラー夫人に言っている。二人だけで行ったお城の思い出を彼女は大切にしていたのだし、あの時の気持ちを大事に心にしまっていたのである。彼女の自由気ままな行動は、彼には理解できないところがたくさんあったが、彼女が亡くなった後、それとは正反対な一途な気持ちに気がついたのだ。それで、すでに引用したように彼は「彼女は亡くなる前に私にことづてを残していました。私はその時はその意味がわかりませんでした。しかし、後になってわかりました。彼女は人の敬意をありがたく思ってくれただろうということです。」(51)とコステロ夫人に言ったのである。しかしながら、こういった彼女の一途な気持ちも彼女の一面的な特質なのである。それとは正反対の特質もまた彼女の性格である。デイジーの自由奔放な見かけの姿と一途な気持ちという内面の姿という、外相と真実<sup>7</sup>の違いが明ら

かになったが、実はそれだけではなく、内面には一途な気持ちと同時にそれとは矛盾した気ままな性格もあるのだ。最終的にウィンターボーンはそのことを理解したのであろう。彼女は常に矛盾する性格をもっていることを彼は知ったのであり、彼女だけでなく、自分も含めた世間の人間もまた性格にこういった矛盾をはらんでいることに気がついたのである。

### おわりに

ジェイムズは、人間の性格の矛盾を描いている。その矛盾は大きな目立つものではなく、とても小さなわかりにくいものであった。しかし、かえってそういったわかりにくい矛盾であったために、より現実味のある小説になったのである。デイジーやミラー夫人は、おそらく自分たちの性格に潜む矛盾には気がつかなかったであろう。しかし、ウィンターボーンだけはデイジーが亡くなった後、コステロ夫人との会話のなかで自分の性格にある矛盾に気がついている。彼は、自分の性格にも、デイジーやミラー夫人のような矛盾があることに気がつき、そして、因習的な社会の習慣にそって生きることを決めたのである。彼は、デイジーに出会ってから後のどっちつかずの考え方を改めようとして、彼女のような自由奔放な概念を理解する気持ちを捨て、ヨーロッパの価値観をもつことに決めたのだ。それによって、彼は自分の性格のなかに存在する矛盾を消そうとしたのである。もちろん、そういった試みが成功したかどうかはわからない。しかし、それはともかくも、小さな矛盾ということに気がつき、それについて考え、それを描くことが、人間らしい人間を描けることになるのだとジェイムズは考えていたのかもしれない。作者は、徹底して人間の矛盾を強調しようとして、物語の最後まで、相反する噂を書いている。語り手は、ウィンターボーンのことについての人々の噂について「彼はジュネーヴで生活するために戻っていった。そこからは、彼が滞在する動機について、とても矛盾した説明が伝えられている。彼は熱心に勉強しているという噂と、彼はとても賢い外国の婦人にとっても関心をよせているというほのめかしとで

ある。」(51)と述べている。このことは物語の初めの方にも同じようなことが書かれていて、彼がジュネーヴに滞在している理由について人々の相反した噂が書かれている。作者は物語の初めの方と終わりにウィンターボーンについての人々の相反した噂を書くことによって世間一般の噂から個人にいたるまで、その考え方に含まれている矛盾あるいは相反を強調しているのである。

## 註

- 1 この作品はかなりの部分がウィンターボーンの視点から見た見方であり、必ずしも作者ジェイムズの視点だとは断定できない。また、ジェイムズの視点自体、作品によりゆらぎを見せているようだし、このことは大きな問題なので今後の課題とする。
- 2 Christof Wegelin & Henry B. Wonham, eds. *Tales of Henry James; The Texts of the Tales, The Author on his Craft, Criticism*, Second Edition (New York, London: W.W. Norton & Company, 2003) ,p.5. 以下本論におけるテキストからの引用はすべてこの版からのものとし、引用文末の括弧内に頁数を記す。なお、この版の原本は、イギリスで最初に出版されたものを再印刷したものである。また、日本語での引用箇所は筆者の試訳であり、頁数は原典による。
- 3 吉川道夫は、ヘンリー・ジェイムズのことについて次のように述べている。

すでにジェイムズの受けた「感性教育」については十分論じられている所だが、この海外を各地転々と移りかわる教育からも、すでに幼時期より活動的であるよりは静かな観察者としての態度が発達していたようである。更に、十八歳の時ニューポートでの火事事件では、その消火作業中、生涯悩み続ける結果を残すほどの「得体の知れぬ傷」を受け、第二人が入隊するが、彼は南北戦争に参加できなかったことも、自然に活動

的でなく、静観的な間接的な態度に満足するようになっていた原因と考えられる。(高橋正雄編『ヘンリー・ジェイムズ研究』、所収 吉川道夫、「ヘンリー・ジェイムズとその文学；初期（1843年－1880年）」、p.37-38)

- 4 L・エデルは、ヘンリー・ジェイムズは「またヨーロッパを遍歴しているアメリカ人の家族にとりわけて注目した。母親はなげやりで、子供達は厳しい躾けをうけていないといった家族だ。そして彼らの生活には教養および礼節の規準が全く欠如していることを彼は心に留めたのだ。これらは天真爛漫なアメリカ人氣質に附随する短所であった。」と述べている。(行方昭夫 翻訳者代表『ヘンリー・ジェイムズの世界』、所収 L・エデル、大沢正佳訳「ヘンリー・ジェイムズ」、p.12) さらに、「この作品に登場するのは上流中産階級の一家で、放任主義で子供に甘い両親は全く子供たちの言うままになり、異郷の地にあってなすところを知らず、子供たちは奔放な生活を送っているのだ。」とも述べている。(同上、p.21)

- 5 チャールズ・ホフマンは、次のように述べている。

... James always preferred European values over American values whenever the two sets were in conflict. James would have been shocked by this judgment as he was puzzled by the Philadelphia critic and editor who turned down *Daisy Miller* because it was “an outrage on American girlhood.” The implication is that James is somehow “un-American” because he was critical of American culture and society and because he left America and did not come back. (Hoffmann,17)

『デイジー・ミラー』のような作品の出版を拒否するアメリカの社会や文化に作者は憤りを感じ、そのこともアメリカの社会や文化を批判する一つの要因になっているかもしれない。

- 6 キャロル・オーマン (Carol Ohmann) は、引用文を使ってウィンターボーンのことについて次のように述べている。

He knows, for a moment at the end of the nouvelle, that he has made a mistake; he knows he has wronged Daisy because he has stayed too long abroad, has become too rigid in his values. Yet his knowledge does not change him. The

authorial voice concludes the tale by mocking Winterbourne's return to the narrow social code of restraint and prejudice:

Nevertheless, he went back to live at Geneva, whence there continue to come the most contradictory accounts of his motives of sojourn: a report that he is "studying" hard—an intimation that he is much interested in a very clever foreign lady.

(Bloom, 28-29)

7 桂田重利は次のように述べている。

物語中でもデイジーを誤解し糾弾するのは、ヨーロッパ社会のコンヴェンションを気にするアメリカ人たちで、彼女の潔白は彼女の死まで認められぬ。そういう形の微妙な社会風俗の差をあつかい、作者がよくとりあげる「外相と真実」のテーマが見られる。(谷口陸男編『20世紀英米文学案内1：ヘンリー・ジェイムズ』所収 桂田重利「デイジー・ミラー：Daisy Miller: A Study」、p,194)

### Works Cited

Bloom, Harold, ed. *Henry James's Daisy Miller, The Turn of the Screw, and Other Tales*. New York, New Haven, Philadelphia, Chelsea House Publishers, 1987, including Carol Ohmann, "'Daisy Miller': A Study of Changing Intentions'.

Hoffmann, Charles G. *The Short Novels of Henry James*. New York, Bookman Associates, 1957.

James, Henry. Christof Wegelin & Henry B. Wonham, eds. *Tales of Henry James; The Texts of the Tales, The Author on his Craft, Criticism*, Second Edition. New York, London, W.W. Norton & Company, 2003.

谷口陸男編『20世紀英米文学案内1：ヘンリー・ジェイムズ』東京、研究社、1967年、所収 桂田重利「デイジー・ミラー：Daisy Miller: A

Study」。

行方昭夫 翻訳者代表『ヘンリー・ジェイムズの世界』東京、北星堂書店、1977年、所収 L・エデル、大沢正佳訳「ヘンリー・ジェイムズ」。

高橋正雄編『ヘンリー・ジェイムズ研究』東京、北星堂書店、1976年、所収 吉川道夫、「ヘンリー・ジェイムズとその文学；初期（1843年－1880年）」。